



<ラムサール通信>

2018年4月18日発行 第188号

●第28回ラムサールセンター総会を開催します●

2018年5月12日(土) 午後3時～/青山 GEOC・セミナースペース

ラムサールセンター(RCJ)第28回総会を下記のとおり開催します。昨年度は、アジア湿地シンポジウムの25年ぶりの日本開催、アジアではBOB(ベンガル湾)プロジェクト、国内ではKODOMOラムサール、そして事務局の引っ越しなど大きなイベントが続きましたが、新事務局での仕事もようやく落ち着きを見せました。

今年の総会は、RCJの新しい体制を決める重要な総会となります。副会長の岩崎慎平さん(福岡女子大学准教授)がRCJ会長に就任する方針が今年の総会で確認され、そのことを改めてみなさんに承認していただき、新体制を支えていくのにふさわしい役員・事務局体制を確立したいと思います。RCJの世代交代をスムーズに実現し、RCJに求められるミッションを明確にし、国際的な期待にも応えていく組織として育てていくにはどうするか、みなさんのお知恵とご協力を改めてお願いします。

日時: 2018年5月12日(土) 午後3時30分～5時

会場: 地球環境パートナーシッププラザ(GEOC) セミナースペース

東京・渋谷区神宮前 国連大学1F Tel: 03-3407-8107 Web: <http://www.geoc.jp/>

※JR 渋谷駅、地下鉄表参道から徒歩。

※終了後は、恒例の懇親会です。(場所は会場近くを予定)

●第101回RCJ<ワイズユース>ワークショップ●

会員ショートトーク・シリーズその①

総会に先駆けて2018年5月12日(土) 午後1時から、同じ会場で、第101回<ワイズユース>ワークショップを開催します。

ラムサールセンターの会員数は現在約110人。そのうち日本人が90人、アジアの人が20人。自然科学者、社会科学者、法律家、ジャーナリスト、編集者、NGOリーダー、行政官、デザイナー、コンサルタント、学校の先生、主婦、学生など多彩な顔ぶれで構成され、それぞれの分野で活躍していますが、同じラムサールセンター会員どうしが互いの専門領域や得意分野の知見や最新情報にふれあう機会は意外に限られています。

そこでことしから、ラムサールセンター会員をスピーカーとして迎え、より多くの人と共有したいと思うテーマで話してもらい「会員ショートトーク・シリーズ」を開催します。開催は不定期ですが、必要に応じて随時開催をめざします。新しい情報、知見、提言、討論テーマなど、話したいこと、伝えたいことがある方は、事務局までご連絡ください。

第1回のスピーカーは、会長の安藤元一さん、事務局長の中村玲子さん、会員の中村大輔さんの3人を予定しています。詳しくは次のページをご覧ください。

---

## 第 101 回 RCJ<ワイズユース>ワークショップ 会員ショートトーク・シリーズその①

時：2018年5月12日（土） 午後1時～3時

所：地球環境パートナーシッププラザ（GEOC）セミナースペース

東京・渋谷区神宮前 国連大学1F Tel: 03-3407-8107 Web: <http://www.geoc.jp/>

※JR 渋谷駅、地下鉄表参道から徒歩。

プログラム：

- ・「AWS 佐賀ステートメントから見た湿地の現状と今後」 安藤元一さん（RCJ 会長）
- ・「RCJ 活動の位置と意義—NGO だからできること」 中村玲子さん（RCJ 事務局長）
- ・「ラムサールセンターと子ども湿地交流、今後への提言」 中村大輔さん（滋賀県渋川小学校教員）

参加費：一般：2000 円、会員・学生：1000 円

※引き続き同じ会場で3時30分～RCJ 総会（5時まで）です。

※懇親会（5時30分～）は会場近くのお店を予定しています。懇親会に参加する予定の方は、あらかじめ事務局までメール、ファクス、電話でお知らせください。懇親会だけの参加でもかまいません。

---

### ●ベンガル湾岸の湿地の住民による「湿地の賢明な利用」調査・交流プログラム報告●

2018年2月22～25日、インド国オディッシュャ州で、「ベンガル湾岸の湿地の住民による『湿地の賢明な利用』調査・交流プログラム」をおこないました。この活動はRCJの「インド洋ベンガル湾岸諸国の湿地協力国際ネットワークの構築—地域住民の気候変動適応、減災、生物多様性保全に対するキャパシティビルディング」（経団連自然保護基金助成事業）の一環として、インド、バングラデシュ、ミャンマーのNGOの協力を得て実施したものです。バングラデシュとミャンマーのベンガル湾沿岸域の漁業コミュニティの代表者3人が、オディッシュャの漁業コミュニティを訪問し、その暮らしぶりにふれ、サイクロン被害やウミガメなどの生物多様性保全について意見交換・相互交流しました。

インド、バングラデシュ、ミャンマーのベンガル湾岸で沿岸漁業を営んでいる人々の暮らしは、政治・言語・文化・宗教などが異なっても、湿地の生態系サービスに生計を深く依存しているという共通項があります。気候変動、海面上昇、自然災害の激甚化、資源の枯渇、貧困など、直面する課題の多くも共通しています。それら3国の沿岸コミュニティの住民が直接出会い、交流するなかから、国際的に重要な財産であるベンガル湾海洋生態系の持続可能な利用に向け、協働のネットワークを構築する重要性を実感してもらうことが目的でした。

ミャンマーからはNGOのBANKAの協力でモッタマ湾岸の漁業者代表、バングラデシュからは Bangladesh POUSHの協力でテクナフ海岸の住民代表らのはるばる参加し、インドのNGOのPallishree、Wetlands International South Asiaのコーディネートで、沿岸漁村のNolia Nuagaon村やPodompeta村を訪問し、地元コミュニティと交流しました。

RCJ会員の中村玲子、田辺篤志、新井雄喜、大原みさと、尾崎友紀、長倉恵美子、Sanowar Hossain、Bishnu Bhandari、Sansanee Choowaew、D.P.Dash、Ajit K. Pattnaikさんのほか、WIJの比留間美帆さん、九州大学の林博徳さんが参加しました。

なお、上記のベンガル湾岸交流プログラムにさきがけて2018年2月18～22日、北海道のサロマ湖から漁業者の高橋康之さんはじめ6人が、10年ぶりにオディッシュャ沿岸のチリカ湖を訪れました。ホタテの養殖で有名なサロマ湖はチリカ湖と同様、海に面した汽水湖で、20年近く前、環境悪化に悩むチリカ湖がサロマ湖の環境管理を見習い、困難を克服したという国際協力の歴史があります。サロマ湖の漁師さんたちもベンガ

ル湾岸交流プログラムの一部に参加し、ミャンマーやバングラデシュの漁師さんと交歓しました。

なお中村玲子、田辺篤志、長倉恵美子、Bishnu Bhandari さんはこのあとラムサール条約第 13 回締約国会議のアジア地域準備会合（スリランカ・チラー）に参加するとともに、スリランカのベンガル湾岸湿地調査をしました。

### ●『AWS2017 プロシーディングス』完成●

AWS2017 の『プロシーディングス』（デジタル版・英語／実行委員会編集）が刊行されました。今回は印刷・製本版は刊行されず、AWS2017 のホームページに掲載しており、以下からダウンロードできます。

<http://aws2017.org/documents/proceedings.pdf>

このプロシーディングスの完成を受けて、2018 年 3 月 28 日、東京の環境省会議室で、まとめの AWS2017 実行委員会が開催されました。環境省（堀上勝野生物課長）、日本国際湿地保全連合（名執芳博会長）、ラムサールセンター（安藤元一会長）、日本湿地学会（島谷幸宏会長・実行委員長）の主催 4 団体はじめ、事務局（長倉恵美子、中村玲子）らが出席し、①AWS2017 開催報告、②成果「佐賀ステートメント」の確認、③決算報告をおこない、これでほとんどすべてのプログラムを終了しました。今後、10 月のラムサール条約第 13 回締約国会議（ドバイ）にこの成果を報告・提供して、実行委員会は解散します。詳細は総会で報告します。

### 写真・ベンガル湾岸コミュニティ交流プログラムから



Podompeta 村の会合で発言するミャンマーの住民代表



名札には、英語、ミャンマー語、ベンガル語、オリヤ語（オディッシュの言語）で名前が書かれました

同会合で発言するバングラデシュ住民代表



ドライフィッシュづくりを見学

